

## ボランティア企画の実施報告書(本学主催のみ)

<b>企画名称 (講演タイトル)</b>	東洋大学ボランティア WEEK 「SDGs と子どもの人権」
<b>講師</b>	秋山映美氏(株式会社クレアン)
<b>開催期間・日時</b>	2020年12月16日(水) 15:15~16:15
<b>会 場</b>	webex を用いた配信 ※事前学習として、Youtube で資料動画を配信
<b>目 的</b>	SDGsと子どもの人権に焦点をあて、国際社会における子どもとSDGs、子どもを取り巻く環境と人権、企業が取り組む子どもの人権などについて学び、自分たちができることを考える。
<b>参加者数</b>	授業履修者数:148名 授業外申込者:7名にオンデマンドを配信している。 ※この授業は事前にオンデマンド(youtube)にて講義を受講し、当日は担当教員、外部講師および受講者でディスカッションや質疑応答を行う。 当日参加18名 ※主な内訳は、以下の通り。【内訳】履修学生13名、履修生以外5名
<b>協 力</b>	社会学部の専門科目「児童福祉論B」(担当:森田明美先生)と連携して実施
<b>活動内容(概要)</b>	
<p>企業のCSR報告書企画制作支援、CSR/サステナビリティ推進支援、また自治体等に研修等を行っている、株式会社クレアンの秋山様を迎え、「SDGsとは」「SDGsと子どもの権利」「企業がどのように取り組みをしているのか」を事前テキストにより学習の上、ディスカッションを行った。</p> <p>当日はwebでの実施であったことから、香港や中国にいる学生からも参加もあった。</p> <p>参加学生より各自質問を受け、外部講師及び担当教員より説明を行った。</p> <p>○テレビ等で最近「SDGs」のキーワードをよく聞くようになったが、日本の取り組みは世界と比べるとどの程度なのか？</p> <p>→一言に「日本」といっても、「政府」・「企業」によって、回答が異なる。「政府」としては、目標の設定に関しては遅れていると思われる。「企業」については、“今やっていることをSDGsゴールに当てはめる”、“現在抱えている課題を解決していく”という形が多い。</p> <p>→政府及び企業が「SDGs」に対して“積極的”なのかについては、判断が分かれる。</p> <p>政府は「今までやっていること」を積み重ねている。という状態。</p> <p>企業については、「17のゴール」によって取り組みのレベルが違うように思える。</p> <p>5.「ジェンダー」については女性管理職や役員、議員の数等を見ても遅れていると思われる。</p> <p>16.「平和と公正」についても取り組みとしては難しい。</p> <p>○東洋大学が「SDGs」に対して最近積極的になってきた理由は？</p> <p>→東洋大学で「SDGs」を推進するプラットフォームが整ったことで、2019年度からボランティア支援室でも企画等を進めている。</p> <p>→政府&gt;企業&gt;NPO・学校 という流れで、「教育機関」にもSDGsに関する取り組みが具体化され実際に活動を行っている段階となっている。</p> <p>皆さん自身も身近なことから「SDGs」にかかわる活動をすることができる。</p> <p>NGO等の活動に参加や寄付をする、「商品」を買う際に“認証マーク”がついているものを買うことで、SDGsに取り組みをしている企業を“消費者として選択”する。ことも活動の一つとなる。</p>	

## ボランティア企画の実施報告書(本学主催のみ)

○取り組みない企業がある場合はどのような理由があるか？

→「規模が小さい会社」については難しいのではないかと。「社員の生活安定」、「専門の担当者必要」など課題も多い。しかし、「消費者の意識」が向上すれば、企業は取り組まないわけにいかない状況となるので、変わっていくと思われる。

私たちも「おかし」(フェアトレード商品)などを意識して、「消費者としての質」を上げていく必要がある。

○CM等で差別的な表現が原因で「炎上」が起こってしまう理由は？

→企業を中心にいる世代は、これまでの教育で「人権」が取り扱ってこられなかったのではないかと。

企画者としては「差別の意図はない」と思っていることが原因。企業への研修等を行い、専門家を交えることで、リスクの回避が必要。また、最近は教育の現場でも取り組みがされているので、世代が進めば減少すると思われる。

○児童労働について企業は事実を知っているのか。

→現地の企業及び親世代が自分たちも今までやってきていることから「当たり前」だと思っている。

悪い「ブローカー」等もいるので、委託をする企業側が現地の企業へ児童労働の解消に向けた対応を行うことが必要。

他には「差別」に対する世界の対応(アメリカとヨーロッパの違い)や「選択制別姓」について議論を交わすことができた。

ディスカッションに参加した学生は、積極的に質問や意見を口頭およびチャットを用いて表現し、他の学生とも内容を共有することができて有意義な時間を持つことができた。

また、アンケート等により、理解の定着度について調べたところ、17の目標については理解されていることが分かった。ただ、課題としてSDGsが発展途上国に向けられた取り組みであると理解した学生が24%もいた。このことから、今後、学生の学習の場としては、自分の生き方などに引き寄せて考える機会を提供することが求められると考える必要があると思う。

※写真があれば数枚を添付。但し、HPや広報誌に掲載する場合があるため、被写体の了解を得るなど、掲載可能な写真を提出してください。

